コラム51－　西安事件

毛沢東

毛沢東（写真）は張学良から引き渡された憎むべき蒋介石を早速殺そうとするが、ソ連のスターリンが蒋介石を決して殺してはならぬという厳命が出されます。この命令を受けた毛沢東は「真っ赤になり、悪態をつき、足を踏み鳴らして怒った」といわれています。スターリンは、当時、日本軍に対抗できるのは中国共産党軍ではなく、蒋介石の国民党軍だと思っていたのです。この事件によって、蒋介石は毛沢東の共産党軍と戦うのを止め、日本軍と戦うことを約束させられます。　すなわち、スターリンの「日本と国民党を戦わしめよ！　両者の疲弊困窮の極みにおいて、天下は自ずから共産党のものになる」という戦略は、この西安事件をきっかけにしてその図式通り軌道を走り始めることになります。

ソ連は、日露戦争を利用して革命を成功させたと考えていましたから、今度は日中間の戦闘を利用して中国に共産政権を樹立しようとしたのです。こうして、1936(昭和11)年12月24日、国共合作が成立します。周恩来・蒋介石会談が行われ、国民党と共産党との戦いを中止して、一緒に抗日戦に専念することを約束させられます。

西安事件をはさんで、1936(昭和11)年から1937(昭和12)年にかけて、蒋介石の国民党政府の中国統一が、国共合作の進行もあってほぼ完成します。

西安事件以降、蒋介石の対共産政策および対日政策が180度変換し、米国とソ連が結び、蒋介石の対日抗争を経済面、軍事面等、あらゆる面で支援し、否応なく蒋介石をして、対日戦に向かわしめることになります。